

## 精神・行動・神経発達の統合的理解 ～治療に有用な診立て方～

かねてより、アメリカ精神医学会の診断カテゴリーは神経発達障害に関して積極的であった事は周知であるが、WHO が 30 年ぶりに改定する ICD11 の精神科疾病分類が DSM5 の診断カテゴリーと同様に第一に神経発達の障害を位置づけた事は非常に意味深いと言える。そういった背景から臨床を考えると、これまでの単なる疾病モデルとしての理解から、「環境と個人のそれぞれの特性の相互作用の結果析出する病態」という、本来の精神医学の視点がより重要になってきた事になる。つまり「適応モデル」で理解する事がより重要になったのであり、そのための治療者側のスキルが問われる時代になってきたといえることができる。ではそのスキルが準拠すべき精神医学的な理論はどこにあるのであろうか。私の知るところ、この点に関するシステムティックな精神科医のスタンダードは少なくとも日本には見当たらない。まれに独自の理論を局所的に展開している個人やグループはあっても、殆どの治療者は従来の「疾病モデル」での理解の枠を出ない。しかし例えばうつ病性障害における「完全な寛解とは」などの議論が噴出しているということからもわかるように、適応能力の向上までもが、少なくとも临床上は、精神医学の範疇となってきたことからは、「寛解しているから」あるいは「疾病分類に当てはまらないから」治療対象ではない、と精神科医が逃げることができなくなってきたと言わざるを得ない。基調講演では、演者なりの臨床的な精神医学理論をプレゼンテーションし、適応スキルの習得が治療上重要であるという事を明確にしておきたい。